健康通信

～市民病院より～

問合先　市民病院（☎76―4131）

▲腎臓内科部長　大石　秀人

腎性貧血とは

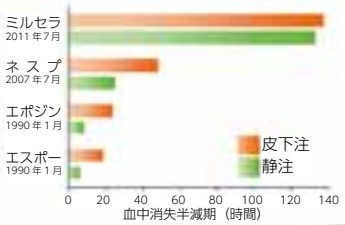
今回は腎性貧血とその治療法についてお話しします。腎臓は、尿を作るという役割以外に、さまざまなホルモンを分泌しています。そのひとつに血液をつくる働きを促進する「エリスロポエチン」（以下、EPO）と呼ばれるホルモンがあります。腎臓の働きが低下するとEPOの分泌が減り、血液をつくる能力が低下し貧血になります。この状態を「腎性貧血」と呼んでいます。EPOの発見には日本人研究者が大きく関わっています。熊本大学の宮家隆次先生は、再生不良性貧血の患者さんから2、550リットルもの尿を集め、乾燥させた尿を携えて1975年に渡米し、2年後の1977年にEPOの精製に成功しました。その後、EPOは製品化され、1990年に患者さんへの使用が可能となりました。EPO製剤は、輸血に頼っていた腎性貧血の治療を大きく変えた画期的な薬です。

腎性貧血の診断と治療

腎性貧血の診断には血液中のEPO濃度の値が参考になります。貧血が高度になると、通常は血液中のEPO濃度は上昇して血液をつくる働きが促進されます。しかし、腎性貧血の患者さんでは、貧血の程度から予想される血液中のEPO濃度よりもはるかに低い値となります。

腎性貧血の患者さんから「鉄分の多い物を食べればいいですか？」との質問をよく受けますが、鉄分の多い物を食べても貧血は改善しません。むしろ、腎機能が低下している患者さんでは、鉄分の多い肉や魚などのタンパク質の摂取は控えるべきです。腎性貧血の治療には、EPO製剤を使います。通常は、血液中のヘモグロビン濃度が10g／dl未満になったら、EPO製剤の注射を開始します。鉄が不足していると、貧血が改善しないので、鉄を飲み薬か注射で補充します。

従来のEPO製剤は半減期が短く、血液透析患者さんでは週3回、保存期腎不全患者さん（まだ透析治療を受けていない腎不全患者さん）では2週から月1回の注射が必要でした。最近になって、構造を改良して半減期が延びたEPO製剤が発売されました（左グラフ参照）。血液透析患者さんでは週1回～月1回、保存期腎不全患者さんでは月1回から2カ月に1回程度の注射で済むようになりました。ヘモグロビン濃度の目標値は、血液透析患者さんでは10～11g／dl、保存期腎不全患者さんでは10～12g／dlとなっています。



▲エリスロポエチン製剤

◆お知らせ

市民病院助産師、看護師募集

勤務

●平成26年4月1日㈫～

●病棟勤務　3交替と2交替

●外来・手術室勤務　2交替

※資格取得者は平成25年7月（昭和38年7月2日以降に生まれた方）、平成25年10月（昭和38年10月2日以降に生まれた方）または平成26年1月（昭和39年1月2日以降に生まれた方）の採用も可能です。

※6月1日㈯、7月6日㈯、8月3日㈯以降、毎月同様の試験あり。

対象　次のすべてを満たす方

●助産師または看護師資格取得者、平成26年3月助産師または看護師資格取得見込者

●昭和39年4月2日以降に生まれた方

人員　80人程度

試験

●**内容**　適性検査、面接

●**とき**　5月11日㈯午前8時30分～

●**ところ**　市民病院8階講堂

申込・問合先　4月30日㈫（必着）までに、履歴書（写真貼付）、卒業証明書または卒業見込証明書、資格免許証の写し（資格取得者のみ）を郵送または直接病院総務課（〒485―8520住所不要☎76―4131）